大行寺信暁の著書の板元・発行者・版権

――江戸時代後期から明治時代中期における仏書の出版――

膽吹　覚

はじめに

信暁は江戸時代後期に、京大坂を中心に活躍した真宗の僧侶である。信暁は名を曇蔵、法名は信暁、正定閣と号する。佐竹氏。安永三年（一七七四）八月一日に、美濃国不破郡徳光村、真宗大谷派長源寺了雄の長男として生まれる。十一歳の時に長源寺住職を継承するが、享和三年（一八〇三）、三十歳の時に長源寺を実弟本空に譲り、修学のために上洛する。上洛後は宗学に加えて、梵暦を円通（普門律師）に学び、梵暦鼓吹に尽力する。文政三年（一八二〇）七月、信暁は真宗佛光寺派本山佛光寺随応上人に帰依して、佛光寺派に帰参する。翌四年（一八二一）十二月二十五日、長谷山北ノ院大行寺を創建し、その初代住職に就く。天保九年（一八三八）から安政四年（一八五七）までに、佛光寺の夏安居で計十八回にわたって講師を担当し、天保十一年（一八四〇）六月に学頭職を授与される。安政五年（一八五八）六月十四日逝去。享年八十五歳であった[1]。

本稿では江戸時代後期から明治時代中期に刊行された信暁の著書の板元・発行者並びにその版権について考究する。

1　江戸時代後期の板元

〈表1〉は信暁の著書を一覧表にしたものである[2]。

		No.	書　　名
書物 冊子	写本 （稿本）	47	第十八願極草
		48	頒暦講話並説教
		49	翻訳
		50	梵暦指示
		51	梵暦要義
		52	末代無智金雨談
		53	銘文夏講
		54	文殊要拠
		55	立世阿毘曇論日月行品講記
		56	和州御用日記
一枚刷（江戸）		57	現世利益弥陀直説
		58	御消息集抜書
		59	小児早世善縁
		60	大地震両川口津浪記
		61	二河白道譬図
		62	念仏三昧
		63	毘沙門護世之天尊略縁起
		64	仏足石正図
		65	冥加策進
		66	目さまし
		67	洛陽長谷山大行寺本堂宮殿須弥壇募縁記
		68	蓮如上人の御しめし(寿像並銘之事)
所在 不明		69	いろは和讃
		70	往生安楽勧導弁
		71	王法願三門分別
		72	王法願私考
		73	大原問答講弁
		74	改邪鈔会通返破
		75	観経真骨
		76	教行信証大意
		77	現益賛極草
		78	光明本講録
		79	光明本附録
		80	御絵伝略解
		81	御本書講録
		82	十二宮法語
		83	宿曜経略解
		84	諸経讃講録
		85	僧訓日記
		86	大経略考
		87	歎異抄講録
		88	天文起経講義
		89	天文風骨
		90	毘沙門和讃
		91	法然伝
		92	梵暦草
		93	梵暦風骨

〈表1〉 大行寺信暁著書一覧

		No.	書　　名
書物 冊子	板本 （江戸）	1	山海里
		2	阿弥陀経即生篇
		3	観経隠彰義
		4	四十八願得聞鈔
		5	正信偈一言鈔
		6	三帖和讃歓喜鈔
		7	五帖一部御文寸珍
		8	故事因縁唱導譬喩録
		9	親鸞聖人御荼毘所延仁寺旧跡
		10	専修念仏の行者・平太郎の記
		11	法然上人御伝文抜書
		12	一枚起請文講話
		13	いろはうた
		14	法のゑん
		15	信後相続・歓喜法の道
		16	法義中よし
		17	講衆名録
		18	善光寺如来像相記
		19	大弁才天十句讃
		20	文殊和讃
		21	文殊和讃註解智田鈔
		22	嫁威谷物語
		23	仏暦大寒気由旬便覧・四時異同辨辯斥
		24	寄附人名録
		25	現世利益和讃勧導
			（同上、続篇は明治15年刊）
	板本 （明治）	26	説教譬喩辨
		27	五悪段鼓吹
		28	大原問答勧導
		29	釈迦如来涅槃像勧喩録
		30	安心ほこりたたき註釈
		31	説教五悪段因果実験録
		32	説教往生要集勧導辯
	写本 （稿本）	33	願王成就文考・附因願略考
		35	帰三宝偈（帰三宝偈講録）
		34	極草
		36	恵日法印宿王経玄譚要論
		37	広文類聴記
		38	御開版真宗宝典御披露
		39	御本書三門分別
		40	重誓偈講録
		41	十二宮出拠
		42	宿曜経発端
		43	信巻私考
		44	神光記
		45	真実證巻・真仏土巻私考
		46	説法明眼論講話

この九十三点の中、私がその存在を確認できたのは六十八点である。そして、この六十八点をその形態から見ると、書物・冊子（五十六点）と一枚刷[3]（十二点）とに分類できる。更に書物・冊子を板本と写本で分けると、板本が三十二点で、写本が二十四点である。この三十二点の板本の中、明治元年以降に新たに刊行された書物は七点である。すなわち、江戸時代後期に刊行された信暁の板本は二十五点、一枚刷りは十二点、計三十七点となる。

〈表2〉はこの三十七点の板元を一覧表にしたものである。江戸時代後期までに刊行された信暁の板本は〈表2〉に掲示した通り、寺板と町板とに大別できる[4]。

(1) 寺板

寺板は大行寺蔵板本、本山佛光寺蔵板本、その他の寺院の蔵板本、の三種に分類できる。まずは大行寺蔵板本から見ていこう。

大行寺は信暁が初代住職を務めた寺である。現在の大行寺は真宗佛光寺派本山佛光寺の佛光寺通を挟んで北側、高倉通の東側に建っている。大行寺が現在地に移転したのは、嘉永六年（一八五三）十二月である。信暁は文政三年（一八二〇）六月に、本山佛光寺から大行寺の寺号を賜っているが、嘉永六年十二月までの大行寺は独立した一寺院を構えておらず、佛光寺通りと高倉通りの交差点を西へ入った、現在の洛央小学校付近に客殿を拝領して仮の坊舎を構えていたと伝えられている[5]。

〈表2〉に掲げた通り、板本の表紙見返しや刊記や奥付などに「大行寺蔵板」と明記された板本は十一点、同じく「大行寺蔵板」と記載された一枚刷りは三点、計十四点であった。その具体例を挙げると、『阿弥陀経即生篇』（龍谷大学大宮図書館所蔵、121. 4/129-W）は、その表紙見返しに「正定閣述作／阿弥陀経即生篇　全壱冊／洛陽　大行寺蔵版」とあり、その第百二十一丁裏に「平安　大行寺蔵板／彫刻　華洛　寺田弥助」とある。また、『正信偈一言鈔』（大行寺所蔵）は、その第一冊表紙見返しに「正定閣述作／正信偈一言鈔　全四巻／洛陽　大行寺蔵版」とあり、その第四冊後表紙見返しには「天保四年巳十月／平安大行寺蔵版／不許売買／彫刻　寺田弥輔」と記されている。更に一枚刷りでは『仏足石正図』（大行寺所蔵）には、その本文末尾に「権少僧都信暁書之〔勅許

／上人位）（印）（僧都／信暁）（印）／皇都　大行寺蔵版」とある。

このように「大行寺蔵板」と明記されていないが、それと推定される書物・冊子が三点、一枚刷りが七点、計十一点ある。大行寺蔵板本と推定される冊子三点は、『講衆名録』（筆者架蔵本）、『善光寺如来像相記』（同上）、『寄附人名録』（同上）である。『講衆名録』は大行寺がその門徒に向けて真宗門徒としての心得を説いたものであり、『善光寺如来像相記』は大行寺が主宰する善光講への参加を呼び掛けたものである。そして『寄附人名録』は大行寺移転建立への寄附金を募ったものである[6]。こうした冊子は大行寺がその門徒に向けて配布した冊子であるから、そこに板元は記載されていないが、これらは大行寺蔵板と推定してよいであろう。また、八点の一枚刷りでは、例えば『毘沙門護世之天尊略縁起』（大行寺所蔵）には「勅許上人位権少僧都洛陽大行明顕之寺主曇蔵信暁謹誌」とあり、『目さまし』（同上）には「弘化三年午六月書之、皇都大行寺曇蔵信暁」とあるように、その本文末尾（一枚刷りの左隅）に著者名が明記されている。ゆえにこれらの一枚刷りも大行寺蔵板であると推定した。

このように大行寺蔵板本（推定を含む）は計二十五点であり、江戸後期に刊行された信暁の板本・一枚刷り（計三十七点）の約七割を占める。

次に、本山佛光寺蔵板本について見ていこう。

真宗佛光寺派本山渋谷山佛光寺は真宗十派の一つである。佛光寺派は親鸞聖人を宗祖とし、その弟子である真佛上人を第二世とし、同じく親鸞の弟子である源海上人が第三世を継ぎ、その後も法灯を伝え、現在の第三十三代門主真覚に至る[7]。東西本願寺派が親鸞聖人の子孫が継承した血脈相承であるのに対して、佛光寺派は法脈相承である。その所在地は江戸時代後期も現在も、京都の佛光寺通り高倉通りの南側である。

信暁の著書で本山佛光寺蔵板（「渋谷山御蔵版」）と明記された書物は、『阿弥陀経即生篇』（筆者架蔵本）、『三帖和讃歓喜鈔』十八冊本（同上）、『仏暦大寒気由旬便覧・四時異同辨辯斥』（国立国会図書館所蔵、VF7/N100）の三点である。『阿弥陀経即生篇』（筆者架蔵本）はその第一冊の表紙見返しは白紙であり、第三冊第百二十一丁裏に「渋谷山御蔵版／御弘通　大坂南久宝寺町心斎橋北へ入　伊丹屋善兵衛」と明記されている。『三帖和讃歓喜鈔』

〈表2〉 江戸時代後期の板本・一枚刷の板元

	No.	書　　名	書型	冊数	寺　板			町　板		不明
					大行寺	佛光寺	その他	板　元	その他	
板　本	1	山海里	半紙本	36冊	○	○（第5篇のみ）	×	×	×	×
	2	阿弥陀経即生篇	半紙本	1冊	○	×	×	×	×	×
			半紙本	3冊	○	○	×	風月荘左衛門（京都）	×	×
	3	観経隠彰義	半紙本	1冊	×	△	×	×	×	×
	4	四十八願得聞鈔	半紙本	4冊	×	△	×	永田調兵衛（京都、慶応元年官許）	×	×
	5	正信偈一言鈔	半紙本	4冊	○	×	×	×	×	×
	6	三帖和讃歓喜鈔	半紙本	18冊	×	○	×	×	×	×
			半紙本	19冊	○	×	×	×	×	×
	7	〈五帖／一部〉御文寸珍	半紙本	15冊	○	○（第2帙のみ）	×	×	×	×
	8	〈故事／因縁〉唱導譬喩録	中本	3冊	×	×	×	四書堂（京都）、安政5年刊	×	×
	9	親鸞聖人御荼毘所延仁寺旧跡	未装丁	1帖	×	×	×	×	×	○
	10	〈専修／念仏の／行者〉平太郎の記	半紙本	1冊	○	×	×	×	×	×
			大本	1冊	×	×	×	×	×	○
	11	法然上人御伝文抜書	半紙本	1冊	○	×	×	×	×	×
	12	一枚起請文講話	半紙本	1冊	○	×	×	×	×	×
	13	いろはうた	半紙本	1冊	○	×	×	松屋宅兵衛（大坂）	×	×
	14	法の゛ん	半紙本	1冊	×	×	○	菱屋卯助（京都）	×	×
	15	〈信後／相続〉歓喜法の道	半紙本	1冊	×	×	×	菱屋友七（京都）	×	×
	16	法義中よし	半紙本	1冊	○	×	×	×	○	×
	17	講衆名録	半紙本	1冊	△	×	×	×	×	×
	18	善光寺如来像相記	半紙本	1冊	△	×	×	×	×	×
	19	大弁才天十句讃	折本	1冊	×	×	○	×	×	×
	20	文殊和讃	和讃本	1冊	×	×	×	×	○	×
			半紙本	1冊	×	○	×	×	×	×
	21	文殊和讃註解智田鈔	半紙本	1冊	×	×	×	勝村治右衛門（京都）・河内屋茂兵衛（大坂）・須原屋茂兵衛（江戸）	○	×
	22	嫁威谷物語	半紙本	1冊	×	×	○	合翰堂（京都）	×	×
	23	仏暦大寒気由旬便覧・四時異同辨辯斥	半紙本	1冊	○	○	×	×	×	○
	24	寄附人名録	半紙本	1冊	△	×	×	×	×	×
	25	現世利益和讃勧導	小本	1冊	×	×	×	丁子屋九郎右衛門・丁子屋平兵衛・丁子屋七兵衛（京都）、万延元年刊	×	×

一枚刷	26	現世利益弥陀直説	1 枚	△	×	×	×	×	×
	27	御消息集抜書		×	△	×	×	×	×
	28	小児早世善縁		×	×	×	×	○	×
	29	大地震両川口津浪記		△	×	×	×	×	×
	30	二河白道譬図		○	×	×	×	×	×
	31	念仏三昧		○	×	×	×	×	×
	32	毘沙門護世之天尊略縁起		△	×	×	×	×	×
	33	仏足石正図		△	×	×	×	×	×
	34	冥加策進		△	×	×	×	×	×
	35	目さまし		△	×	×	×	×	×
	36	洛陽長谷山大行寺本堂宮殿須弥壇募縁記		△	×	×	×	×	×
	37	蓮如上人の御しめし（寿像並銘之事）		△	×	×	×	×	×

注） ○印は蔵板者が書籍に明記されていることを、△印は蔵板者と推定されることを示している。

十八冊本（筆者架蔵本）は、各帙第一冊表紙見返しに「全部十八巻帙三冊／三帖和讃歓喜鈔／正定閣権少僧都述作」、各帙第三冊後表紙見返しに「渋谷山御蔵版／調進所　京都　室町高辻上ル町　中島利左衛門／同　大坂　船津橋北詰西江入　松岡宅兵衛」とある[8]。最後に『仏暦大寒気由旬便覧・四時異同辨辯斥』（国立国会図書館所蔵、VF7/N100）は、後表紙見返しの奥付に「渋谷山御蔵版／調進所　京都室町高辻上ル町　中島利左衛門」と記されている。ただし、〈表2〉に掲げた通り、この三点はいずれも本山佛光寺蔵板本とは別に、大行寺蔵板本も存在する。つまり、これらの三点は、大行寺と本山佛光寺が、それぞれ板元となって刊行していたのである。なお、『仏暦大寒気由旬便覧・四時異同辨辯斥』（九州大学中央図書館所蔵、天文和算／天文／116）に至っては、その表紙見返しに「弘化三年丙午仲夏新彫／大寒気由旬便覧　四時異同辨辯斥　合本／仏御殿御蔵版」とあり、その後表紙見返しには「渋谷山御蔵版／調進所　京都室町高辻上ル町　中島利左衛門」と記されており、一冊の中に二つの板元が記載されているケースもある。

また「渋谷山御蔵版」と明記されていないが、それと推定されるものが三点ある。『観経隠彰義』と『四十八願得聞鈔』、『御消息集抜書』である。『観経隠彰義』（龍谷大学大宮図書館所蔵、121. 3/109-W/1）はその後表紙見返しに「嘉永二巳酉年正月／御絵所姉崎織江敬写／渋谷山御蔵版所　京室町通佛光寺下ル町、中島利左衛門／御弘通所　五条通柳馬場西へ入町　菱屋又兵衛」とあり、また『四十八願得聞鈔』（筆者架蔵本）は、その第四冊後表紙見返しに「弘化二乙巳年十一月　渋谷山御蔵版所　京室町通仏光寺下ル町　中島利左衛門／御弘通所　五条通柳馬場西へ入町　菱屋又兵衛」と記されている。この二書は「渋谷山御蔵版」ではなく、「渋谷山御蔵版所」と記されている。「渋谷山御蔵版所」は中島利左衛門（俵屋）の肩書とも読めるが、中島利左衛門はあくまでも調進所であって、その板元は本山佛光寺であったと見るべきではなかろうか。また、一枚刷りでは『御消息集抜書』（個人所蔵、嘉永六年刊）の末尾に「右抜書、佛光御門主侍講、勅許権少僧都正定閣満八十才信暁印施」とあり、これも本山佛光寺が板元を務めたと推定される。

更に本山佛光寺とその末寺である大行寺が相合板として刊行した書物が二点ある。それは『山海里』と『〈五帖

／一部〉御文寸珍』である。『山海里』（全十二篇三十六冊）は、その第五篇のみが本山佛光寺蔵板で、その他の十一篇はすべて大行寺蔵板である[9]。『〈五帖／一部〉御文寸珍』（全十五冊、筆者架蔵本）は、各帙第一冊表紙見返しに「権少僧都正定閣述作　全十五巻／〈五帖／一部〉御文寸珍　初帙（～五帙）三巻／洛陽　大行寺蔵版」――ただし「初帙」の箇所が、第二帙は「帙」のみである――とあり、第六冊後表紙見返しに「渋谷山御蔵版／調進所　京都室町高辻上ル町　中島利左衛門／同　大坂舩津橋北詰西江入　松岡宅兵衛」とあり、第十五冊第四十九丁裏に「御仏殿大行寺蔵版／嘉永二巳酉年孟春／傭筆　岡田春灯斎／彫刻　寺田弥助」と記されている。『〈五帖／一部〉御文寸珍』は、全十五冊のうち第六冊を含む第二帙のみが本山佛光寺蔵板で、それ以外は大行寺蔵板である。

本山佛光寺とその末寺である大行寺が相合板で出版した『山海里』と『〈五帖／一部〉御文寸珍』は、ともに冊数の多い大部の書物であり、大行寺が主たる板元となり、本山佛光寺はその一部の板元を務めた。つまり、この二書の出版経費は板元を担当した分量（冊数）に応じて、大行寺が主として負担し、本山佛光寺がその一部を補助したことが知られるのである。

本山佛光寺が信暁の著書の板元を務めた背景として、まず、天保十一年（一八四〇）六月に、信暁が本山佛光寺の学階の最高位である学頭に就任したことが考えられるであろう。信暁が学頭就任後（天保十一年後）に著述した書物は、大行寺という一末寺の住職の著書であると同時に、本山佛光寺の学頭として著作物でもあった。本山が信暁の著書の出版を金銭面から支援することは、佛光寺派教学の興隆につながるものであり、本山としてもメリットがあったはずである。

しかし、信暁の著書に於ける佛光寺蔵板本については、江戸時代後期の佛光寺の経営状況を考慮に入れておく必要があろう。

弘化二年（一八四五）一月、佛光寺第二十四代随念上人が逝去され、嗣子なきによって、関白鷹司政通の第三子教応（後の第二十五代真達上人）を法嗣とし、その後しばらくは随念上人の室である念心尼公が法務を執る。しかし、念心尼公もまた嘉永二年（一八四九）三月に逝去され、その後、真達上人が第二十五代門主に就任する

安政元年（一八五七）までの八年間は、佛光寺の門主は空席であった[10]。江戸時代後期の本山佛光寺の経営は、門主を中心とし、中本寺格であった山内の六院（六坊）が門主を支える体制であった。随念上人が逝去された弘化二年（一八四五）から真達上人が法燈を継承される安政元年（一八五七）までの十二年間、本山佛光寺は実質的には門主が不在であったが、この間も法脈は念心尼公、或いはその嗣子（真達上人）にあった。ただし、本山の経営は山内の六院とその学頭である信暁とが実質的に担っていたのではなかったろうかと推測される。

こうした本山佛光寺の事情を考慮するならば、弘化二年以降に刊行され、本山佛光寺が板元を務めた、信暁の『阿弥陀経即生篇』、『観経隠彰義』、『〈五帖／一部〉御文寸珍』の三点について、少し穿った見方ができるようである。すなわち、当時の信暁が本山佛光寺の経営に関与していたならば、上記三点の信暁の著書の出版に際して、信暁自らが六院へ働きかけ、本山がその板元となるように図った可能性も考えられるであろう。当時の学頭職にあった信暁が、本山でどれほどの権限を有していたのかは憶測の域に止まるものであるが、もし信暁が本山佛光寺の経営に関与していた場合は、信暁の著書における本山佛光寺蔵板本については――特に弘化年間から安政年間に至る期間に刊行された書籍――、注意を要するであろう。

最後に、大行寺と本山佛光寺以外の寺院が板元となって出版されたものが三点あるので、それらを見ておこう。その三点とは『大辯才天十句讃』（嘉永六年四月刊、龍谷大学大宮図書館所蔵、205.5/6W）と『法のゑん』（天保十四年刊、筆者架蔵本）、『嫁威谷物語』（福井大学所蔵、H388-YOM）である。

『大辯才天十句讃』と『法のゑん』の二点は施本である[11]。『大辯才天十句讃』は折本一帖で、その本文末尾に「権少僧都信暁書之／于時嘉永六年四月初巳日／羽州上ノ山住／於高仙寺／某印施」とある。そして、『法のゑん[12]』は信暁著『いろはうた』（大行寺蔵板本）に記載された「いろはうた」の本文はそのままに板木（版面）を改めて彫り、更に数首の道歌を加えて一冊としたものである。その第十四丁表の刊記には「天保十四年癸卯仲夏／筑州嘉麻郡法光寺蔵／施主　黒崎町田姓　宗順」とある。最後に『嫁威谷物語[13]』は、最初は京都の本屋から刊行された

町板であったが、その後、京都山科の西宗寺（本願寺派）がその板木を所有し、西宗寺板として参詣者に配布した。『嫁威谷物語』は町板から始まるので、次節（⑵町板）で詳しく述べることにする。

⑵ 町板

町板は町板のみのもの、町板から寺板になったもの、寺板から町板になったもの、施本、施本から町板になったもの、の五種類に分類できる。

まず町板のみの板本は『〈故事／因縁〉唱導譬喩録』（安政五年官許）、『〈信後／相続〉歓喜法の道』（弘化四年冬刊）、『現世利益和讃勧導』（万延元年刊）の三点である。この三点の板木は、大行寺・本山佛光寺などの寺院が所有することはなかった。

『〈信後／相続〉歓喜法の道』（筆者架蔵本）は半紙本の一冊本である。本書は法然・親鸞・蓮如の御詠歌を巻頭に置き、「親鸞聖人御詠伊呂波歌」「殺生すまじき咄」「当流茶呑噺」などを収録する。本文末尾（第十八丁裏）に「弘化四年丁未冬／正定閣校述／文栄館蔵板」とあり、その後表紙見返しには『三世因果大経五悪図会』の広告を掲載し、その末尾に「京都書林／五条通堺町東入ル北側／ひしや友七」とある。

『〈故事／因縁〉唱導譬喩録』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵、1273/1-3）は中本の三巻三冊で、中国の仏教説話を譬喩として仏法を説いたものである。その第一冊表紙見返しに「大行精舎集編／故事因縁唱導譬喩録　全三冊／皇都書林　四書堂合梓」とあり、その第三冊後表紙見返しには「安政第五暦戊午中冬官許／皇都書林　五条高倉東　菱屋友五郎／六条上数珠屋町　丁子屋七兵衛／魚店油小路東　丁子屋藤吉／五条柳馬場東　丁子屋嘉助」とある。本書は京都の本屋四軒による相合板である。

『現世利益和讃勧導』（筆者架蔵本）は小本の一冊である。本書は親鸞作『浄土和讃』の末尾に収録された「現世利益和讃」全十五首の第一首から第八首までを説いたものである。本書はその奥付に「安政六己未年朧月官許／万延元庚申歳四月上梓／皇都書林／東六条下数珠屋町　丁子屋九郎右衛門／同魚之店間之町角　丁子屋平兵衛／同中数珠屋町　丁子屋七兵衛」とある。信暁は安政五

年（一八五八）六月二十四日に死去しており、本書は信暁が逝去したその翌年、同六年（一八五九）春に官許を得て、更にその翌年、万延元年（一八六〇）四月に上梓された。本書は丁子屋を屋号とする三軒の本屋による相合板である。

この中の『〈故事／因縁〉唱導譬喩録』と『〈信後／相続〉歓喜法の道』の二点は、浄土三部経や正信偈といった経典類の内容を説いたものではなく、中国の譬喩話や蓮如の逸話（説話）を用いたものである。そして、その板元は京都の本屋、沢田（菱屋）友五郎と沢田（菱屋）友七である。友五郎と友七の二軒は、信暁の『山海里』の支配を務めたことが推測される本屋である[14]。ゆえに、『〈故事／因縁〉唱導譬喩録』、『〈信後／相続〉歓喜法の道』の二点は、信暁が彼と懇意な関係にあった本屋――沢田友七・沢田友五郎――からの依頼に応じて著述した可能性が考えられるであろう。

次に、町板から寺板になったものは『嫁威谷物語』の一点のみである。『嫁威谷物語』（筆者架蔵本）は半紙本の一冊本で、越前国吉崎御坊近くの嫁威谷での蓮如上人の逸話を説いたものである。その表紙見返し並びに後表紙見返しは白紙で、本文末尾に「弘化四年丁未冬／正定閣述作」とある。本書（筆者架蔵本）は書袋が現存し、そこに「皇都書林　合翰堂梓」と記されている。「合翰堂」は京都の本屋、沢田（菱屋）友七、菱屋卯助、丁子屋定七の三軒のことで、本書はこの三軒による相合板である（戸崎氏所蔵本に拠る）。ここでも沢田（菱屋）友七がその出版に携わっており、本書も前項で述べた『〈故事／因縁〉唱導譬喩録』、『〈信後／相続〉歓喜法の道』の二点と同じく、本屋（沢田友七など三軒）からの要請に応えるかたちで信暁が執筆したものと推測される。本書はその後、京都の山科にある本願寺派西宗寺蔵板本（福井大学所蔵本）として刊行される。西宗寺は蓮如の墓がある寺として知られる。西宗寺は、本書の刊行に際して、挿絵（三枚の中の一枚）を入れ替え、本文の読点・濁点の多くを削除し、更に本文末尾の「正定閣述作／文栄館蔵板」の箇所を削除し、刊記に「売買不許／蓮如上人御往生之旧地／山科　西宗寺」と記載している。西宗寺板は蓮如上人の墓（「往生之旧地」）を参詣した人たちに、その参拝記念として渡されたものであったようである[15]。

三つ目に、前項とは逆に寺板から町板になったものに

『阿弥陀経即生篇』、『いろはうた』、『法のゑん』の三点がある。『阿弥陀経即生篇』は（弘化三年成稿）は大行寺蔵板本と本山佛光寺蔵板本の二種が確認されているが、更にその奥付に「二条通衣棚／京都書肆／風月荘左衛門」と記載されたものがある。佛教大学図書館所蔵本『阿弥陀経即生篇』（仏書441）の第三冊の奥付には「二条通衣棚／京都書肆／風月荘左衛門」とあり、その第一冊表紙見返しは「正定閣述作／阿弥陀経即生篇　全三巻／（三行目空欄）」とある。この三行目の空欄には「洛陽　大行寺蔵版」とあったはずであるが、この佛教大学所蔵本では見返しの三行目を削除して、奥付に本屋、風月荘左衛門の名前を掲げている。『いろはうた』は大行寺蔵板本（龍谷大学所蔵本、成田山仏教図書館所蔵本）として刊行され、その後、大坂の本屋、松屋宅兵衛から刊行されている。津市津図書館橋本文庫所蔵本（18.6/34）は、松屋宅兵衛が板元となって出版されたものである。その表紙見返しには「大坂書肆合梓」とあり、その奥付には「大坂舩津橋／書林　松屋宅兵衛」と記されている。『法のゑん』（筆者架蔵本）は前述の通り、筑前国嘉麻郡の法光寺（本願寺派）が板元を務めた施本である。本書はその後表紙見返しに「京都書林　東中筋魚店上ル町　菱屋卯助」とあり、その板木が法光寺から京都の本屋、菱屋卯助に移ったことが知られる。[16]

四つ目に施本である。これには『法義中よし』（嘉永元年刊）、『文殊和讃』（弘化四年七月成稿）、『文殊和讃註解智田鈔』（弘化五年一月成稿）、『小児早世善縁』（一枚刷り、嘉永六年七月刊）の四点がある。[17]『法義中よし』は真宗の教義の一つである「平生業成」と「不来迎」について述べたものである。『法義中よし』（本山佛光寺所蔵）は半紙本の一冊本で、表紙見返しと後表紙見返しはともに白紙で、刊記に「嘉永元戊申年五月　無別堂蔵版／刻料寄附／越中高岡　羽廣屋勘左衛門／日向宮崎　柏屋利作／防州岩国　松屋音左衛門」とある。本書の板元である無別堂は法名を釈禿樹としたこと以外は不明である。本書はその刻料を越中国高岡の羽廣屋勘左衛門と日向国宮崎の柏屋利作、防州国岩国の松屋音左衛門の三者が寄附（負担）している。『文殊和讃』（和讃本と半紙本の二種がある）は、文殊菩薩の功徳を讃えた信暁作の和讃三十八首を掲載したものである。本書には施主名は記載されていないが、その注釈書である『文殊和讃註解智

田鈔』の文章から、『法義中よし』の板元を務めた無別堂による施本であろうと推測される。また、『文殊和讃註解智田鈔』（高岡市立高岡中央図書館所蔵、188.7/141）の奥付には「刻版施主　越中高田　羽廣屋勘左衛門」と記載されており、こちらは越中国高岡の羽廣屋勘左衛門による施本である。羽廣屋勘左衛門も『法義中よし』の刻料を寄付した人である。『小児早世善縁』（筆者架蔵本）であるが、これは一枚刷りで、本文末尾に「嘉永六年丑七月廿四日　京　伊勢嘉　印施」とあり、京都の商人「伊勢嘉」による施印であることが知られる。

最後に、施本から町板になったものについて述べておく。前に述べた施本の中、『文殊和讃』と『文殊和讃註解智田鈔』の二点は、その後、町板として出版されている。[18]『文殊和讃』（筆者架蔵本、半紙本）は、その後表紙見返し（奥付）に「室町通佛光寺下ル町／有慶堂　俵屋利左衛門／五条通柳馬場西入町／文林堂　菱屋又兵衛」と記されている。俵屋利左衛門は中島利左衛門で、本山佛光寺の調進所を務め、信暁の『観経隠彰義』や『四十八願得聞鈔』の出版にも携わった本屋で、菱屋又兵衛は沢田友五郎・沢田友七と同じく菱屋一党に属する本屋である。また、『文殊和讃註解智田鈔』（筆者架蔵本、半紙本）は、その後表紙見返しに「三都書林／勝村治右衛門／河内屋茂兵衛／須原屋茂兵衛」とあり、こちらは三都の相合板である。

2　明治時代の発行者と版権

(1)　江戸後期に刊行され、明治時代以降も発行された信暁の著書

〈表3〉は江戸時代後期に刊行された信暁の板本のうち、明治時代以後も出版された書物の発行者についてまとめたものである。江戸時代後期に刊行された二十五点のうち、明治時代以降も発行されたのは十二点であった。〈表3〉に掲出した通り、明治時代に信暁の著書を発行した書店は沢田友五郎（文栄堂・法文館）をはじめ、永田調兵衛（文昌堂）、西村九郎右衛門（護法館）、西村七兵衛（法蔵館）、松田甚六（顕道書院）といった京都の書店が中心であった。このことは、江戸時代後期に於いて信暁の板本を町板として出版した本屋がすべて京都の本

屋であったことと通じるであろう。以下、信暁の著書を多く発行した沢田文栄堂と西村護法館の二店に焦点を当てて考察する。

まず沢田友五郎（文栄堂）から述べる。文栄堂からは〈表3〉に掲出した十二点の中の九点が出版されている。明治時代に沢田文栄堂から発行されたこれら九点の書物は、すべて江戸時代後期と同じく、整版の和装本で、書型も江戸時代後期と同じく半紙本であった。友五郎は江戸時代後期に信暁の『山海里』の支配を担当した本屋であり、その所縁で明治時代になっても信暁の著書の多くの発行に携わったものと考えられる。

京都大学附属図書館所蔵『京都書籍出版文書』（8-58〈キ1〉収録「蔵版控帳」並びに「沢田文栄堂蔵版帳」に拠ると、友五郎（文栄堂）は信暁の板本の板木を十一点、所有していた。その内訳は、丸板が『法義中よし』、『文殊和讃』、『文殊和讃註解智田鈔』、『二河白道譬図』（一枚刷り）の四点、相合板は『山海里』、『観経隠彰義』、『四十八願得聞鈔』、『〈五帖／一部〉御文寸珍』、『〈信後／相続〉歓喜法の道』、『嫁威谷物語』、『大寒気由旬便覧　四時異同辨辯斥』の七点である。これらの板木の中、『山海里』は明治三十四年（一九〇一）十一月の板木市で購入されたと明記されているが、それ以外の板木の購入時期は記載されておらず、確定できない。

友五郎の文栄堂は明治二十年代以降、法文館と店名が変更された後も、信暁の著書を整版の和装本として発行し続けている。その一例を挙げると、『阿弥陀経即生篇』（大行寺所蔵）は半紙本で、その第一冊表紙見返しは「正定閣述作／阿弥陀経即生篇　全三巻／（三行目空欄）とあり、その三行目にあった「洛陽　大行寺蔵版」の箇所が削除されている。そして、その奥付（第三冊後表紙見返し）には「大日本仏学書籍調進所／法文館　京都府平民　沢田友五郎／京都市五条通高倉東入塩竈町第三番戸」と記載されている。沢田文栄堂は『説教学全書』（明治二十九年刊開始）を出雲寺文次郎や西村九郎右衛門ら五肆相合によって活版刷で出版しており、活版印刷と無縁の書店ではなかった[19]。しかし、信暁の著書に関しては活版印刷を用いることなく、江戸時代後期に作られた板木を購入し、整版の和装本（半紙本）として発行していたのである[20]。

次に西村九郎右衛門（護法館）について述べる。西村

〈表3〉 江戸時代に発行された信暁の著書（板本）の明治時代の発行状況

	No.	書　　名	発行者（書店）	所在地	装丁	印刷	書型・判型	冊数	刊年	備考
板本	1	山海里	沢田友五郎（文栄堂）	京都	和装	整版	半紙本	36	不明	34年の板木市で購入
			修道館	東京	洋装	活版	四六判	3	25	
			弘業館	大阪	洋装	活版	四六判	3	25	
			仏教書院	東京	洋装	活版	四六判	3	25	「〈通俗〉仏教百科全書」と改題
			松田善六（顕道書院）	京都	洋装	活版	四六判	3	27	
			顕道書院・西村護法館	京都	洋装	活版	四六判	3	27	「〈通俗〉仏教百科全書」と改題
	2	阿弥陀経即生篇	山内正次郎（丁子屋）	京都	和装	整版	半紙本	3	不明	
			沢田友五郎（法文館）	京都	和装	整版	半紙本	3	不明	
			永田長左衛門（文昌堂）	京都	和装	整版	半紙本	3	不明	
	3	観経隠彰義	沢田友五郎（文栄堂）	京都	和装	整版	半紙本	3	不明	
			永田長左衛門（文昌堂）	京都	和装	整版	半紙本	3	不明	
	4	四十八願得聞鈔	永田調兵衛（文昌堂）	京都	和装	整版	半紙本	4	9	
			沢田友五郎（文栄堂）	京都	和装	整版	半紙本	4	不明	
			西村九郎右衛門（護法館）	京都	和装	整版	小本	4	27	
			西村九郎右衛門（護法館）	京都	洋装	活版	四六判	1	42	
	5	正信偈一言鈔	沢田友五郎（文栄堂）	京都	和装	整版	半紙本	4	不明	
			西村九郎右衛門（護法館）	京都	和装	整版	小本	4	23	
			西村七兵衛（法蔵館）	京都	洋装	活版	四六判	1	31	「正信偈講話」を改題
			西村九郎右衛門（護法館）	京都	洋装	活版	四六判	1	36	「正信偈講話」を改題
			永田調兵衛（文昌堂）	京都	洋装	活版	四六判	1	36	「正信偈談話」と改題
	6	三帖和讃歓喜鈔	西村九郎右衛門（護法館）	京都	和装	整版	小本	10	24	
			西村七兵衛（法蔵館）	京都	洋装	活版	四六判	3	28	「三帖和讃講話」と改題
	7	〈五帖／一部〉御文寸珍	沢田友五郎（文栄堂）	京都	和装	整版	半紙本	15	不明	
			松田甚左衛門（顕道書院）	京都	洋装	活版	四六判	5	26	「〈五帖／一部〉御文章講話」と改題
			西村九郎右衛門（護法館）	京都	洋装	活版	四六判	5	27	「〈五帖／一部〉御文講話」と改題

8	〈故事／因縁〉唱導譬喩録	沢田友五郎・西村九郎右衛門、他1名（鼎足堂）	京都	和装	整版	小本	1	不明	
9	親鸞聖人御荼毘所延仁寺旧跡								
10	〈専修／念仏の／行者〉平太郎の記								
11	法然上人御伝文抜書								
12	一枚起請文講話	沢田友五郎（文栄堂）	京都	和装	整版	半紙本	1	不明	
13	いろはうた								
14	法のゑん								
15	〈信後／相続〉歓喜法の道								
16	法義中よし								
17	講衆名録								
18	善光寺如来像相記								
19	大弁才天十句讃								
20	文殊和讃								
21	文殊和讃註解智田鈔	沢田友五郎（文栄堂）	京都	和装	整版	半紙本	1	不明	
22	嫁威谷物語	永田長右衛門（文昌堂）	京都	和装	整版	小本	1	21	
23	仏暦大寒気由旬便覧・四時異同辨辯斥								
24	寄附人名録								
25	現世利益和讃勧導　続篇	西村九郎右衛門（護法館）	京都	和装	整版	小本	1	16	

護法館も沢田文栄堂と同じように整版の和装本で、信暁の著書を発行した。ただし、その書型は半紙本ではなく、小本であった。西村九郎右衛門は明治十六年（一八八三）に『現世利益和讃勧導』続篇（国立国会図書館関西館所蔵、183-224）を小本の一冊本として出版する。『現世利益和讃勧導』続篇は、その正篇が江戸時代後期の万延元年（一八六〇）に丁子屋九郎右衛門（西村九郎右衛門）他二軒の相合板で刊行されており、この続篇では「現世利益和讃」の第九首から第十五首までが説かれている。西村護法館はその後、『正信偈一言鈔』（筆者架蔵本、四巻四冊、明治二十三年刊）、『三帖和讃歓喜鈔』（筆者架蔵本、二十一巻十冊、明治二十四年刊）、『四十八願得聞鈔』（国立国会図書館関西館所蔵、特36-721、四巻四冊、明治二十七年刊）、『〈故事／因縁〉唱導譬喩録』（筆者架蔵本、一冊、刊年不明）、と相次いで信暁の著書を整版和装本の小本に仕立てて発行している。書型の小型化は江戸時代後期から既に行われていたことであるが[21]、上記五点の小本も、僧侶が説教に赴く際に携帯するに便利であるということがまず考えられるであろう。また、明治時代に於ける書型の小型化は、書籍の流通――郵送販売に伴うコスト――の観点からも求められたことであろう。

こうした整版の和装本（小本）の刊行から少し遅れて、西村護法館は、信暁の著書を活版刷りの洋装本として刊行する。明治二十五年（一八九二）、『山海里』を『〈通俗〉仏教百科全書』と改題し、四六判三冊に仕立てて、顕道書院と相合版で発行した。その二年後の同二十七年（一八九四）、『〈五帖／一部〉御文寸珍』を『〈五帖／一部〉御文講話』と改題し、四六判五冊として発行する。そして、同三十六年（一九〇三）には『正信偈一言鈔』を『正信偈講話』と改題し、四六判一冊本として出版した。

この中の『〈五帖／一部〉御文講話』（国立国会図書館関西館所蔵、166-23、洋装本、五巻五冊、活版刷）の奥付には、「翻刻兼発行者　西村九郎右衛門」「発売所　京都市五条通高倉東エ入　沢田友五郎／同　御前通油小路西エ入　山内正次郎／同　中数珠屋町　西村七兵衛／同　油小路御前通下ル　興教書院／同　油小路花屋町上ル　顕道書院／同　花屋町西洞院西エ入　永田長左衛門」とある。この『〈五帖／一部〉御文講話』では西村九郎右衛門が発行者を務め、沢田友五郎、山内正次郎、西村七兵衛、顕道書院などが発売所として名を連ねている。本

書が刊行されたその前の年、同二十六年（一八九三）一月、京都で仏教書を中心に出版・販売する本屋によって書籍商交換会（後の仏書交換会）が設立された[22]。この書籍商交換会には前掲の書店も参加している。明治二十七年（一八九四）に西村護法館から発行された『〈五帖／一部〉御文講話』の奥付は、京都の書籍商交換会の早い時期の活動を示したものといえるだろう。

(2) 明治時代以降、新たに発行された信暁の著書

明治元年以降、新たに発行された信暁の著書は、『説教譬喩辨』（明治十三年六月刊）をはじめとして、『〈無量／寿経〉五悪段鼓吹』（同十四年一月刊）、『大原問答勧導』（同年四月刊）、『〈釈迦／如来〉涅槃像勧喩録』（同十五年六月刊）、『安心ほこりたたき註釈』（同二十一年八月刊）、『〈説教〉五悪段因果実験録』（同年十一月刊）、『〈説教〉往生要集勧導辯』（同二十三年三月刊）の七点である。この七点の書籍は、すべて小本で、整版印刷の和装本である。また、その発行者（出版人）は『説教譬喩弁』『大原問答勧導』『安心ほこりたたき註釈』『〈説教〉五悪段因果実験録』『〈説教〉往生要集勧導弁』の五点が沢田友五郎（文栄堂・法文館）で、『〈無量／寿経〉五悪段鼓吹』と『〈釈迦／如来〉涅槃像勧喩録』の二点が西村七兵衛（法蔵館）である。前章で考察した通り、友五郎の文栄堂は、江戸時代後期に刊行された信暁の板本の板木を購入・所有し、明治時代以降も江戸時代後期と同じく半紙本の和装本として発行していた。そして、その一方で、明治十三年から同二十三年にかけて、江戸後期には刊行されなかった信暁の説教（法話）の聞書きの筆記原稿を入手し、編集して、新たに板木を彫り、整版・和装本の小本として発行したのである。明治時代以降、信暁の著書を最も多く発行したのは、沢田友五郎の文栄堂（法文館）であったといってよいだろう。

明治時代以降に新たに刊行された七点の書籍は、その書名に「説教」と記されたものが五点ある。――『大原問答勧導』と『〈釈迦／如来〉／涅槃像勧喩録』は、後に活版刷りになった時に『大原問答説教』、『〈釈迦／如来〉涅槃像説教』と改題されている。――また、著者名の記述も「大行寺信暁演説聞書」（『説教譬喩録』『大原問答勧導』）、「大行寺信暁演説」（『〈説教〉五悪段因果実験録』『〈説

教〉往生要集勧導辯』）など、信暁の説教（講話）の聞書きというかたちをとっている。つまり、明治時代になって新たに発行された信暁の七点の著書はすべて、信暁が生前に行なった説教（講話）を筆記・記録したノートを原稿として、書店がそれを編集し、発行した説教本であった。〈表1〉に掲げた通り、信暁の写本・稿本は現在のところ二十四点が確認されているが、前掲の七点の書籍の原稿に相当するものは、そこに含まれていない。大行寺には『帰三宝偈講録』や『重誓偈講録』などの経典の講義録をはじめ、『信巻私考』や『真実證巻・真仏土巻私考』などの『教行信証』についての信暁の講義録、『十二宮出拠』や『宿曜経発端』などの梵暦に関する著作も所蔵されていたが、これらは明治時代前期に新たに発行されることはなかったのである。

(3) 活版印刷された信暁の著書

日本書籍出版協会京都支部編『京都出版史』に拠ると、「明治六年六月、金属活字の印刷所、煥文堂が河原町御池に設立された。これが京都における金属活字印刷の始まりである。しかし、実際に図書の印刷に活字印刷が盛んに利用され出すのはそれから少し下がって、明治二十年代頃からである。[23]」という。

明治二十五年（一八九二）九月、『山海里』（弘業館、大阪）とその改題本である『〈通俗〉仏教百科全書』（仏教書院・東京）の二点が、洋装本の活字印刷として出版される。信暁の著書で最初に活字印刷されたのは『山海里』であり、それは東京と大阪の書店から出版された。

京都の書店では同二十六年（一八九三）に顕道書院から発行された『五帖一部／御文章講話』が古い。その後は翌二十七年（一八九四）に『五帖一部／御文講話』（西村護法館）、『山海里』（顕道書院）、『〈通俗〉仏教百科全書』（顕道書院・西村護法館）、更に翌二十八年（一八九五）には『三帖和讃講話』（法蔵館）と、明治二十年代後半から続々と活版印刷で出版されている。これは前述の『京都出版史』の見解と一致するものである。また、洋装本については大沼宜規氏が「江戸時代まで主流であった和装本は明治十年頃まで、その位置は揺るぐ事がなかった。明治十年代になると洋装本が登場し、明治十八年から二十年代頃にかけて、和装本は装丁の主流の位置を

洋装本に明け渡した[24]。」と述べておられるとおり、信暁の著書でも明治二十年代後半から洋装本が続々と発行されている。

信暁の著書の中、江戸時代後期に板本として出版され、明治時代に活版印刷の洋装本として発行された書物は『山海里』、『四十八願得聞鈔』、『正信偈一言鈔』、『三帖和讃歓喜鈔』、『〈五帖／一部〉御文寸珍』の五点である。『阿弥陀経即生篇』や『観経隠彰義』といった浄土三部経を説いた勧化本は、この対象とはなっていない[25]。真宗門徒にとって、日々の勤行で使用する『正信偈』や『御文』や和讃などが、活版刷りの洋装本として選ばれたのであろう。『山海里』は真宗門徒の日々の勤行とは無関係であるが、最多の五軒の書店から、しかも京都のみならず東京や大阪の書店からも出版されている。こちらは後述する通り、その内容が通仏教的であること、そして説教との関係から活字化されたと推測される。

明治時代以降に新たに発行された信暁の著書では、明治二十七年（一八九四）に『安心ほこりたたき註釈』の活版刷りが名古屋の加藤佳三郎から発行され、その後、同三十一年（一八九八）に『説教譬喩辨』（西村九郎右衛門）、同三十八年（一九〇五）に『〈釈迦／如来〉涅槃像勧喩録』が『〈釈迦／如来〉涅槃像説教』（同上）と改題されて発行されている。また、大正三年（一九一四）には『大原問答勧導』が『大原問答説教』（永田文昌堂）と改題されて発行されている。一方で、活版刷りの洋装本として発行されなかったのは、『〈無量／寿経〉五悪段鼓吹』、『〈説教〉五悪段因果実験録』、『〈説教〉往生要集勧導辯』の三点である。この三点の中の二点は、『仏説無量寿経』下巻の五悪段を扱ったものである。今日の真宗の説教で五悪段が説かれることは少ないようであるが、そうした傾向が明治時代後期に於いて既に看られる点が留意される。

活版刷りの洋装本として発行された信暁の著書を見ると、その書名を改題して出版されることが多かったようである。

例えば『山海里』は『〈通俗〉仏教百科全書』と改題されている。「通俗仏教」は『通俗仏教新聞』（明治二十七年二月創刊）をはじめ、安国清『通俗仏教対話』（明治二十三年刊）、高田道見『通俗仏教要領』（同二十六年刊）、同『通俗仏教人生論』（同三十一年刊）、三栗孤桐『通俗

仏教唱歌集』（同四十二年刊）など、明治時代から大正時代にかけて、専門家向きの仏教書ではなく、一般向きの仏教書の書名に多く冠された言葉である。信暁の『山海里』は、明治時代の通俗仏教書の比較的早い時期の出版物であったといえるだろう。また、信暁の『正信偈講話』や『三帖和讃講話』、『〈五帖／一部〉御文講話』など、その書名に「講話」を用いることもその特徴として指摘できる。「講話」もまた、明治時代以降に仏教書のみならず、さまざまなジャンルの書名に広く用いられた言葉である。そこに用いられた「講話」には、専門的な内容を平易な言葉で解説した文章という意味があったようである。さらに明治時代になって新たに刊行された信暁の書物では、『〈釈迦／如来〉涅槃像説教』『大原問答説教』と改題され、「説教」の二文字が使用されている。

このように活版刷りの洋装本では、「通俗」「講話」「説教」といった言葉を書名に使用する傾向が認められる。こうした傾向は信暁の著書が明治時代以降も出版され続けた理由と関係しているので、本章第五節で詳しく述べたい。

(4) 信暁の著書の版権

ここで明治時代に刊行された信暁の著書の版権について述べておきたい。

明治八年（一八七五）の出版条例が改正され、三十年間の図書専売権としての版権が定められた。その第二条には「図書ヲ著作シ又ハ外国ノ図書ヲ翻訳シテ出版スルトキハ、三十年間専売ノ権ヲ与フベシ。此ノ専売ノ権ヲ版権ト云フ。但シ版権ハ願フト願ハザルトハ本人ノ随意トス。故ニ版権ヲ願フ者ハ願書ヲ差出シ免許ヲ請フベシ。其願ハザル者ハ各人一般ニ出版スルヲ許ス[26]。」と明記されている。

信暁の著書では明治九年（一八七六）に刊行された『四十八願得聞鈔』（整版、半紙本）の奥付（第四冊後表紙見返し）に「慶応元年乙丑五月官許／明治九年五月八日版権免許／下京区第廿三区花屋町油小路東入町／出版人　永田調兵衛」とある。信暁の著書の版権に関する記録としては、これが最も古いものである。この『四十八願得聞鈔』の版権は、「出版人」である永田調兵衛（文昌堂）

にある。

その後、明治十年代に入って刊行された『説教譬喩辨』『〈無量／寿経〉五悪段鼓吹』『大原問答勧導』『〈釈迦／如来〉涅槃像勧喩録』『現世利益和讃勧導』続篇の五点について、『明治前期書目集成』（ゆまに書房）を調査したところ、『〈無量／寿経〉五悪段鼓吹』以外の四点はすべて『出版書目月報』の「無版権之部」に記載されていた[27]。信暁の上記四点の著書はその出版届は提出されたが、その版権の請求はなされなかったのである。

明治二十年（一八八七）出版条例から版権に係る内容が分離され、版権条例が成立する。この条例の第七条に「版権ハ著作者ニ属シ、著作者死亡後ニ在テハ其相続者ニ属スルモノトス。講演若クハ演説ヲ筆記シテ一部ノ書ト為シタルモノノ版権ハ、講義者若クハ演説者ニ属シ、若シ筆記者ニ於テ講義者若クハ演説者ノ許諾ヲ経テ出版スルトキハ筆記者に属シ、筆記者死亡後ニ在テハ其相続者ニ属スル[28]。」とある。つまり、版権は著作者に属し、著作者死後はその相続人に帰属すると定められたのである。

版権条例の成立を受けて、信暁の著書では明治二十一年（一八八八）に出版された『〈説教〉五悪段因果実験録』（筆者架蔵本、整版、小本）の奥付には「明治廿一年十一月十日印刷／同年十一月十八日出版／定価金五十五銭／版権所有／発行者　京都府平民　沢田友五郎　下京区第十九組塩竈町三番戸五条通高倉東エ入北側／著作者相続人　京都府平民　佐竹信如　下京区第十二組西前町二十六番戸大行寺住職／印刷者　京都府平民　西野弥三郎　下京区第三十二組上中之町」と記載されている。『官報』でも明治二十一年十一月二十六日付の「版権登録図書」の欄に「第一五一一号　説教五悪段因果実験録　一冊　佐竹信如　京都」と登録されている。すなわち、『〈説教〉五悪段因果実験録』（明治二十一年刊）は「信暁演説」を編集した著作であるから、その版権は演説者である信暁に属するが、信暁が逝去しているため、その相続者である大行寺第五世佐竹信如に本書の版権は帰属するということなのである。

これに対して、明治二十三年（一八九〇）に出版された『〈説教〉往生要集勧導辯』（筆者架蔵本、整版、小本）第三冊（下巻）第五十八丁表には「明治廿三年三月一日印刷／同年三月二十日印刷／定価金五十五銭／版権所有

／発行兼印刷人　京都府平民　沢田友五郎　京都市五条通高倉東入塩竈町三番戸／著作者相続人／佐竹信如／京都市佛光寺通西前町廿六番戸大行寺住職」とあり、かつその後表紙見返しには「大日本仏学書籍調進所／文栄堂　京都府平民　沢田友五郎　京都市五条通高倉東へ入塩竈町三番戸」とある。本書の版権について、『官報』では明治二十三年三月二十六日付で「五一八一　説教往生要集勧導辯（三冊）　著作者故大行寺信暁、版権所有者京都沢田友五郎」と登録されている。版権条例に従うならば、本書の版権も「著作者相続人」である大行寺第五世信如となるはずである。しかし、本書の発行者である沢田友五郎がその版権を所有し、登録している。この場合は著作者相続人である信如と発行者である沢田友五郎の間で版権の所有をめぐって協議がなされ、その結果、友五郎が版権を所有することとなった推測される。なお、明治時代に出版された信暁の著書で、その奥付に「版権所有」と明記されたものは、『〈説教〉五悪段因果実験録』と『〈説教〉往生要集勧導辯』の二点のみである。また、明治二十年代に整版の小本で出版された『安心ほこりたたき註釈』（明治二十一年八月、沢田友五郎）、『嫁威谷物語』（同年十月、永田文昌堂）、『正信偈一言鈔』（同二十三年三月、西村九郎右衛門）、『三帖和讃歓喜鈔』（同二十四年一月、西村九郎右衛門）の四点は、いずれもその出版届出はなされているが、その版権登録はなされていない。[29]

(5) 明治時代以降も信暁の著書が発行された理由

最後に信暁の著書が明治時代以降も発行された理由について考えてみたい。

明治九年（一八七六）五月八日、『四十八願得聞鈔』の版権免許が永田調兵衛（文昌堂）に下りた。『四十八願得聞鈔』（筆者架蔵本、半紙本、整版）の奥付（第四冊後表紙見返し）には、「慶応元年乙丑五月官許／明治九年五月八日版権免許／下京区第廿三区花屋町油小路東入町／出版人　永田調兵衛」とある。明治九年は信暁の没後十八年目にあたり、大行寺住職は第五代信如である。これが明治時代以降で最初に出版された信暁の著書である。

明治十年代に入ると、同十三年六月に『説教譬喩録』（小本、整版）が京都の沢田友五郎から刊行される。『説

教譬喩録』は江戸時代に刊行されずに、明治時代に入ってから発行された書物である。この『説教譬喩録』以降、『〈無量／寿経〉五悪段鼓吹』（同十四年一月刊）、『大原問答勧導』（同年四月刊）、『〈釈迦／如来〉涅槃像勧喩録』（同十五年六月刊）、『安心ほこりたたき註釈』（同二十一年八月刊）、『〈説教〉五悪段因果実験録』（同年十一月刊）、『〈説教〉往生要集勧導辯』（同二十三年三月刊）と、江戸時代には出版されなかった信暁の著書が、いずれも小本の整版印刷で、京都の本屋から相次いで出版された。

こうした七点の書籍の発行が好評であったのであろうか、明治二十年代後半に入ると、同二十五年九月に『山海里』とその改題本である『〈通俗〉仏教百科全書』が、四六判の活字印刷の洋装本として東京と大阪の本屋から発行される。その後、『正信偈一言鈔』（『正信偈講話』『正信偈談話』と改題）、『三帖和讃歓喜鈔』（『三帖和讃講話』と改題）、『〈五帖／一部〉御文寸珍』（『〈五帖／一部〉御文章講話』『〈五帖／一部〉御文講話』と改題）、『四十八願得聞鈔』が、四六判の活字印刷の洋装本として、京都の本屋を中心に発行される。

なお、こうした明治前期における整版の小本や活版刷りの四六判のとは別に、京都の沢田友五郎（文栄堂）を中心に、江戸時代後期の板木を使用した整版の半紙本、すなわち板本も明治前期を通して流通していたことを書き添えておく。

それでは、信暁の著書は明治時代以降も発行され続けたのはなぜだろうか。その理由として、まず彼の著書に通仏教的な傾向が認められることが考えられるであろう。

柏原祐泉氏は江戸時代と明治時代の仏教学の違いについて、「明治の仏教学の発展は、江戸時代の宗派別の宗学に対し、仏教全体を再確認しようとする形で進められた」[30]と述べている。すなわち、明治時代の仏教学の特徴として、それが通仏教的な研究であったことが指摘されている。信暁は江戸時代後期に活躍した真宗の僧侶であるが、円通（普門律師）に師事して梵暦（仏暦）を研究し、且つその鼓吹に尽力した人である。梵暦は真宗という宗学の枠を超えて、その学問領域は仏教学――近世的にいうならば仏学――全般にわたる。信暁は梵暦の研究を通して通仏教的な教養と考え方を身に着けた真宗の僧侶であった。彼の主著である『山海里』が明治二十年代に『〈通俗〉仏教百科全書』と改題されて出版されたことは、彼

の学問が真宗学の枠組みを超えて、より広範な通仏教的なものであったことを如実に物語っている。

二つ目の理由には、明治時代における説教の盛行が挙げられるであろう。石井研堂『明治事物起原』収録「説教の盛行」には、次のように記されている。

明治五年三月、教部省を創置して教導職をおき、「敬神愛国の上旨を体すべき事、天理人道を明にすべき事、皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事」の三条を布達し、近衛忠房、千家尊福、本願寺光尊、東本願寺光勝の四人を権少教正に補し、三条の普及を図らしめたり。即ち各管内寺社に於て追々説教を執行し、老若男女をして、其の稼業の余暇を以て信仰の社寺に詣り聴聞致さすべき旨なり。（中略）これよりして、海内靡然として説教の声高く、如何なる山村海郷にも、その催しなきは無く、説教用書籍は日を逐ひて塡むる程にて、三条の御趣意といふ語は当時の人の口の端より離れざりし。(31)

明治政府による教部省の創設と教導職の設置によって、説教は全国的に盛行し、それに伴って説教用書籍の需要も高まった。信暁の『山海里』や『故事因縁／唱導譬喩録』は、天竺・中国・日本の仏教故事や説話、更に近世後期の日本各地の奇談などを例話として用いながら、具体的に分かりやすく仏教を説いたものである。こうした内容ゆえに、信暁の著書は、僧侶が説教する際の副読本（参考書）としての需要があったと推測される。

また、信暁の著書の多くは仏典類の研究書や注釈書（専門書）ではなく、『正信偈』や『御文』などを平易な言葉と文章で説いた勧化本であった。こうした勧化本の文章は僧侶が説教（布教）の場で門信徒に語りかけるような臨場感のある文体が用いられることが多い。そのために信暁の著書を含めた江戸時代後期の勧化本は、明治時代に入ると、説教本として再びその需要が高まることとなる。

その例を挙げるならば、信暁演説聞書『大原問答勧導』（全三冊、整版、小本、沢田友五郎版、明治十四年四月刊）収録「説教書略目録」を見ると、友五郎の文栄堂では信暁の『故事因縁／唱導譬喩録』『説教譬喩辨』をはじめ、菅原智洞の『勧導簿照』『説法百華園』『説法魏々編』、粟津義圭『御伝演義鈔』『即席法談四十八首』『阿弥陀経

依正談』、本法院義譲の『歎異鈔法話』『口伝鈔教人録』『四季唱導編』など、江戸時代後期に活躍した真宗の説教僧の著書を蔵版していたことが知られる。また、明治二十六年から刊行が始まった『説教学全書』（全十編、出雲寺文治郎、沢田友五郎、西村九郎右衛門他二名による五肆相合、四六判、活版刷り）は、その第一篇が菅原智洞述『勧導簿照』、第二編が粟津義圭述『帳中五十座法談・巻懐五十座法談』、第三篇は同じく義圭述『四十八願喚鈔』である。

このように信暁、智洞、義圭、本法院など江戸時代後期に説教僧として活躍した僧侶の著書（勧化本）が、明治時代になると説教本として出版され、「説教用書籍は日を逐ひて塡むる程」（『明治事物起原』）であったという。信暁の著書が明治時代も引き続いて出版され続けた背景には、こうした明治時代における「説教の盛行」が考えられるであろう。

本稿では江戸時代後期から明治時代中期に刊行された信暁の著書の板元・発行者並びにその版権について考究した。それはまた、江戸時代後期から明治時代中期に至る期間の、京都における仏書（特に勧化本）の出版に関する史的変遷を辿る論考でもあった。次稿では本稿での考察を踏まえて、江戸時代後期から明治時代中期に刊行された信暁の著書の弘通（流通・販売）について、その奥付の分析を中心に考究してみたい。

【注】

(1) 佐竹淳如・工藤康海『勤王護法　信暁学頭』、大行寺史刊行後援会、昭和十一年刊、参照。

(2) 〈表1〉は拙論「大行寺信暁書誌目録」（『大行寺信暁に関する書誌学的研究』収録、科学研究費助成事業・基盤研究C、平成二十九年三月刊）に基づき、更にその後の補充調査を含めて作成した。

(3) 信暁の一枚刷については、和田恭幸「大行寺信暁の一枚刷」（『国文学論考』第四十九号、都留文科大学国語国文学会、平成二十五年刊）に、「信暁は伝道布教や募縁のために一枚刷を作成し頒布した。いずれも淡々とした内容で、珍妙な巷間説話等は記さず、格調高く上品な内容の一枚刷である」との指摘がある。

(4) 〈表1〉で不明と分類した書物は『親鸞聖人御荼毘所延仁寺御旧跡』（大行寺所蔵、未装丁）、『専修念仏の行者

平太郎の記』（筆者架蔵本、大本）、『仏暦大寒気由旬便覧・四時異同辨辯斥』（大谷大学図書館所蔵、外大/91/1。九州大学中央図書館桑木文庫本、桑木文庫／和書／64。龍谷大学大宮図書館本所蔵、273/38W）、の三点である。この三点は板元が明記されておらず、また書誌学的分析からもその板元を推定することができなかったものである。

(5) 注(1)と同じ。

(6) 拙論「長谷山大行寺『寄附人名録』について――近世後期、京都に於ける真宗寺院の新寺建立と出版物――」、『芸文稿』第十号、芸文稿の会、平成二十九年七月刊。

(7) 渋谷有教『佛光寺系図』、本山佛光寺、昭和五十七年一月刊。

(8) 拙論「大行寺信暁『三帖和讃歓喜鈔』の板本と弘通」、『国文学論叢』第六十三輯、平成三十年二月刊。

(9) 拙論「大行寺信暁『山海里』の書誌学的研究――近世後期京都に於ける真宗末寺の出版――」、『佛教文学』第四十二号、仏教文学会、平成二十九年四月刊。

(10) 佛光寺教学資料編纂委員会編『真宗佛光寺派　佛光寺年表』、真宗佛光寺派教務所、平成九年四月刊。

(11) 拙論「大行寺信暁の施本」、鈴木俊幸編『書籍文化史』第十九号、平成三十年一月刊。

(12) 拙論「大行寺信暁『いろはうた』の諸本」、『国語国文学』第五十七号、福井大学言語文化学会、平成三十年三月刊。

(13) 拙論「『嫁威谷物語』の諸本と作者に関する考察」、『国語国文学』第五十一号、福井大学言語文化学会、平成二十四年三月刊。

(14) 注(9)と同じ。

(15) 注(13)と同じ。

(16) 注(12)と同じ。

(17) 注(11)と同じ。

(18) 注(11)と同じ。

(19) 磯部敦『出版文化の明治前期――東京稗史出版社とその周辺――』第四章「文栄堂の出版環境（上）」、ぺりかん社、平成二十四年二月刊。

(20) 沢田友五郎（文栄堂）が所蔵していた板木は、現在では本山佛光寺に移管されている。

(21) 仏書の小型化（縮刷版）については、万波寿子『近世仏書の文化史――西本願寺教団の出版メディア――』（法蔵館、平成三十年三月刊）に指摘がある。

(22) 西村明『仏教書出版三六〇年』、法蔵館、昭和五十三年十一月刊、十九～二十ページ。

(23) 日本書籍出版協会京都支部編『京都出版史』、平成三年三月刊、十六ページ。

(24) 大沼宜規「明治期における和装・洋装本の比率調査―帝国図書館蔵書を中心に―」、『日本出版史料』第八巻、日本エディタースクール出版部、平成十五年五月刊。

(25) 信暁の『四十八願得聞鈔』は『仏説観無量寿経』収録の四十八願を説いたものであるが、これだけは活版刷りの洋装本として西村護法館から出版されている。それは四十八願が真宗の教義の中核をなすもので、今日でも説教で説かれることが多く、真宗門徒には馴染みの深いものであることによると考えられる。

(26) 『太政官条告全書』明治八年第九巻第一丁裏、有隣堂。

(27) 明治文献資料刊行会編『明治前期書目集成』、ゆまに書房、昭和五十年刊。

(28) 『法令全書』明治二十年上巻、内閣官報局、二五〇～二五一ページ。

(29) 注(26)と同じ。

(30) 柏原祐泉『日本仏教史　近代』、吉川弘文館、平成二年刊、八十三ページ。

(31) 石井研堂『明治事物起原』、橘南堂、明治四十年刊、百五十五ページ。

【付記】

本稿は第百十七回「書物・出版と社会変容」研究会（平成三十年一月、一橋大学）における研究発表、「近世後期、真宗末寺の出版における板元について――京都、大行寺信暁の著書（板本）を通して――」に基づき、加筆修正したものである。発表に際してご教示賜った先生方に感謝申し上げる。また、資料の閲覧を許可された諸機関にお礼申し上げる。なお、本稿は「十九世紀真宗末寺の寺版の書誌学的研究――京都、大行寺信暁の著書を通して――」（平成三十年度、科研費・基盤研究(c)、課題番号17K02411）の成果である。